

吾人の良心に赫々と光を放ち玉ふ神聖なる如來は吾人をして至善に導く指導者なり
た吾人を永遠の安きに保護する守本尊なり

如來の神聖は至善の大道を照す光明なり、闇夜に航路を照す燈明臺なり、神聖が概して宗教の戒律となりて道徳を律す、戒律に作持と制止との二義あり、一は正善を作すべきを律し佗は邪惡を制止すべきを律す、又自律と佗律とあり佗律とは自己の非惡を制裁して正善に進むべきも意志の力弱くして自由を得ぬ者には他動的に道徳の律を爲す、自律とは如來の神聖なる光明の照臨に自己の非惡を制止して聖意の正善に向ふて道徳的行爲をなすを云ふ、換て云はゞ神聖なる神の聲が自己の良心に囁きて制止作善すを自律と云ふ

正義 頌に、正義は撰善捨惡にて 至善に向て進ましむ

神聖は道徳律を照す光にて正義は至善に行く道なり、人の方より云はゞ道を見るの眼と正道に行く足なり、又神聖は實行の智慧、正義は實行の足なり、彌陀の本願に知願とは即ち神聖にて撰善捨惡の本願は正義なり、撰善の理法に依らざれば眞善微妙の淨土實現し難し

斯の如く捨惡擇善の本願より成りし精美眞善の精中の靈なる淨土に入らんに如來は如何なる規律を以て吾人を淨界に攝取すべきぞ曰く如來は撰善本願を以て衆生を攝取す知らずや攝取の本願力は常恒不斷に衆生の心意を默檢して撰善し玉ふ、然らば合格と不合格とは何を以て標準とす一切の非惡の根本は主我なり自力なり非惡なるを信認し自力を擲ち純ら如來を信せよ他力とは一切正善眞美を攝したるの義なり主我主義と自力は撰捨し純粹に如來に歸すれば自然に同化せらるる故に己を献けて如來に歸命するは是れ正義なり是彌陀の本願に撰擇せられたる人なり、又如來本願力とは絶對の終局目的の勢力なり、絶對の目的に參加せるには我の個人目的を犠牲にせざるべからず、個人目的を捨て絶對目的に歸せば必ず大海に流入す

恩 寵 頌に、恩寵は三縁の恵にて、靈を育みて聖子とはす

譬ば子を養ふに師父の指導を受け父の業を學ぶに先たちて母の慈愛の懷に在て哺乳の養より家庭の教育を受くる如く、如來が衆生の靈を養ふ母としての力を恩寵と云

信念のある處に恩寵は被むる小兒生れて初めは母の恩容を見ること能はざるも哺乳の養に依て漸く兒體と共に五官の機能も發達して母の温容を見ゆる如く如來の恩寵に依て靈性稍増進し知見を啓示せらるれば如來の慈顔を感じし相好光明に接觸し感情には苦惱を解脱し恩寵に融合し靈妙なる喜樂を感ず等禪悅法喜の妙味を享受し尙進みては意志を靈化し心開く時は如來の神聖光の中に正義の義務を感じ聖子たるの自分を盡す即ち願作佛心そは如來の恩寵に由て益發達し願度生心としては有縁の人に煩つに和顔愛語同事利行等の事を以てす、恩寵に三縁あり無縁の慈と法縁慈と衆生縁慈となり報身如來は靈界の太陽として大悲の光明常に十方法界を照らして無縁は縁せざるなし故に絶對なり

無縁の慈は遍なく照せども此人界の衆生には知見すること能はず焉に於て如來應身を以て世に出で普ねく道教を演べて如來の慈悲に接せしむ佛法を開きて徧なく人類に及ぼす是法縁の慈とす、又世に流布する佛法を師友善知識若くは家庭の教養に依りて素養を受けて導かるゝ衆生縁なり、報佛の恩寵が自然に法身に遍す此を人類に宗教となりて、行はるゝは法縁にて師友及び家庭の教養は衆生縁とす本同一恩寵の應分現なり

大正十二年八月十五日印刷同二十日發行

誌代年六冊發售貳拾錢

年十二冊貳圓

編輯兼發行人

山崎

辨成

印刷人 東京橋區本八丁堀一丁目十五番地
秋場 熊太郎

發行所 東京小石川區水道端二丁目四十四番地
ミオヤのひかり社
振替東京四九三三八番

こ　　才　　ヤ　　の　　光　　歸　　去　　來　　の　　卷

光　　明

斯一縷の光明われらが無始の無明を破す。われらが甚深の罪惡を除く。われらを極樂にみちびくこのひかりによりて更生していける觀世音となり、また大せいしとなる。斯の光の外に佛法あることなし。この光を外にしてげだつあることなし。しやかむにこの光を示さんが爲に世に出たまふ。法藏ぼさつこのひかりを世にあらはさんが爲に五劫に思をこらせり。此のひかり即ちなむあみだ佛なり。この光りによらざれば畢竟して三惡道免るることなし。ア、佛子この光をみとめずして可ならんや。この光われらが眠をさます。この光我に行べきみちを照す。斯光自己を返照せしむ。斯光我と人との融和をなさしむ。斯光しやばを變じて極樂となす。斯光凡夫を轉じて聖となさしむ。斯光鬼を化してほとけとす。斯光十方三世の諸佛を作る。

名號の義解

名詞の解釋　法體義解

名號南無阿彌陀佛、南無は宗教的關係の衆生より佛に對する信仰心、あみだ佛とはこの關係の佛より衆生に對する恩寵を表象す。佛の恩寵と衆生の信仰とに因縁の宗教的關係を結合す。衆生の信仰なきときは佛の恩寵に致一するなく、佛の恩寵なきときは、信仰にしてこの關係をなすに縁なし。

なむあみだ佛とは宗教的關係を名を以て表示する義なり。通じて南無のみを解釋し次に別して彌陀の願意に準じて南無の義を解釋せん。

南無とは梵語にして華には歸命と譯す。この命を以て佛に投歸する義なり。いまは釋す、命とは衆生の天然的精神生活なり。是從來の受想行識の相續なり。この精神生活を投歸して佛の恩寵に即ち全體全幅を佛の恩寵に投歸す。此より人は從來の五蘊相續即ち精神生活に命を捨てて阿彌陀の新生命に入るべし。

この状態を歸命と爲す。命といふもこの肉の色蘊相續を歸すると言ふにあらず。精神的生活を命と云ふ。精神生活を佛に投歸して彌陀の新生命に入しめて南無の義を表す。人天然の精神生活、動物的機能は主我主義にして確然たる目的なし。(以下斷絶)

○

佛阿難に告げたまはく無量壽佛の威神光明は最尊第一にして

嘆徳文要解此大要次に三とす

初に無量壽佛威神光——

關　　係

宗教客體佛の衆生に對する攝化

佛佛の人觸　二恩寵と信仰との合

神佛の恩寵とは無量壽佛因縁花果

彌陀の恩寵を縁とし衆生の信仰を因とし因縁合報する(以下斷絶)

遠大なる望

理想のぼさつとして生活せるもの、遠大なるのぞみなしに目をくらすべからず。望

みなしにあるものは已に心盡死したるものなり。いか成る望かこれなる。聖國の世つぎたらんことなり。聖國の世つぎとならんにはその資格を備へざる可からず。資格とは何ぞや。聖旨の如くにきよからしむるなり。ミオヤにあらせ玉ふ聖徳を興へらるるために望ををこすなり。すべての真理をさとらんとす。心靈をみがくなり。四面玲瓏とかややくようは心情を如來と融合するなり。またこの神聖なるみむねをあらはすよ
うにはたらくなり。正義のみむねをあらはすよふにはたらくなり。世つぎといふことを忘れざるなり。無上の欲望を以て安んぜざるなり。足れりとせざるなり。一日もむだに日をくらさざるなり。一寸の光陰を千金よりをしむなり。むだ話をして時間を費すことをせぬなり。

欲望なき人は貴重なる時間を浪費するなり。一日は極樂の百歳なることを思はざるなり。

欲望なき人は如來が常に與へつゝある無價の寶珠をうけざるなり。

この欲望はいけるくわん世音なり。しやかむにたり。

所念の佛の聖き靈が能念の心に薰染す

楞嚴經の會坐にもろくの菩薩百千の大衆にたいして如來の仰せ玉ふには、ヤもろくのひとたちよ汝等は已に佛法のなかに於て奥室に入りていまは遺る處なきまでに至れり。それにつきておのの銘々に初めて信仰を起したる動機とまたいか成因縁によりて信心開發いたし、無生忍をいたせし、言を換へていはゞ心の更生なせしか、それをよく物がたりをせよ。しからばのちの修行者のために大に信心をすゝめ修行する助成となり、また参考に成るであらうものよとの聖旨を被りて、みなく世こみまつりてまづ第一番に釋尊最初の御化度を蒙りたる處のアニヤキャウヂンニョがすゝみいでて自身のさとりをえたる時の因縁を具さに申のべられにき。つきくながしのかたと次第に我發心せし動機とさとりしさまをかたりけるに、發心緣無量とやら、さまざまの因縁によりて佛種を萌すなかだちとは成りしなれ。さて第二十四番日に大衆のなかりすゝみ出でたまひしところのひとりの賢者、いとうるはしさその貌姿、

翠の髪は自ら肉髻に結び、青蓮の眸織月の眉四八の月の西丹果の唇を動かして欣笑をおこせば、光顔ひかりを添ふ。かりうびんがの聲を發すれば、衆人愛敬せざるなし、この賢者こそはせいしほさつと名のらせ玉ひける。聖者彈咳してのたまひけるは、それがしこと發心しふかく信心をえまた無生忍をさとりし時の因縁をいまつぶさに申上げませうならば、そもそも過去無量劫のそのかみ、無量光如來と申し奉つる佛、世に出ましぬ。つゞきて合せて十二の如來世に出興し玉ひ、末の超日月光佛ふかき御めぐみによりそれがしにいと聖き御法りを教へ玉ひき。すなはち念佛三昧とぞ名づけられたり。そはいかにその三昧を修するぞとならば、たとへばここにいとなさけふかき母にひとりの子ありけるに、子はふと家を出で母のもとを迷ひ出でてより、つひに久しく他國にありていたく困乏し苦を受ることかぎりなし。あまりの身のくるしきに、むかし母のもとにありて朝な夕なになてはぐくまれしことなど思ひ出でてより、しきりに母にあはまほしく、あくがるることかぎりなく、寐てもさめても忘るる間もなくぞありけるに、また母のかたにてもわかれにし子のいかにぶびんやとかなじみのきはみなく、子をわするるひまもなかりしに、子は母をおもひ母は子を思ひ、母と子の相互に憶ひ念ふ念力は、たとひ身は千さとの雲をへだてたればとて心は喜しもへだてたりれば、子があくがるるおもひのうちに母の面かけは宛然として眼の前に彷彿したりしそれと同じく、如來はまことのみおやにたまはまれば衆生は子なり。子は一たび木覺真如のみをやのものとまよひ出で、久しく六道のちまたにた、すみ、まことのみをやましませりともえもおもはず、久しくさまよひけるに、あまり世のはかなさに一たび御のりを聞侍りてより、はじめて如來はまことのみをやなることをしりてより、いまはみをやをたかきみそらのあまたにあくがれたなはつたなき煩惱のあかにけがれ見るだにあさましき身とはなれども、さすがはをや子のしたしみはわが身のほどをわすれ、みをやをしたふことはかぎりなく、寐てもさめても憶ひ念ふことの斷ゆる間もなかりしに、

如來はことに大慈悲にてましませば、つねに衆生を愛念し玉ふことしばしといたまはましまさぬにぞ、あくがるる子の憶念のなかに如來は宛ながら聖き靈なるみすがた

は心眼の前にあらはれ玉ふ。いかにありがたきぞやこれを念佛三昧とはなづく。

但し衆生行住坐臥につねに、如來を憶念ふこと子の母をおもふ如くにてあれば現在當來遠からず佛を拜見し奉る餘の方便をからずしてたゞ寐てもさめても如來を憶念し奉つるばかりぞ。これを香光嚴と名づくなり。それがしは此念佛三昧の法によりて無生忍を得候へばしかしてよりこのかたあまりかたじけなく候へばすべての人に教ゆるに此念佛三昧をもて示すなり。

これぞそれがしが信心獲得したる因縁に候ぞ。念佛三昧によりて自ら衆生の心も佛心と成ることは、譬へばいとかがりたかき香物を器にいれ置く時はその器もそれに薫染していつしか同じかほりと成るごとく、衆生佛を念すれば所念の佛の聖き靈が能念の心に薫染して凡心白から聖心と成るなり。これを香嚴淨と名づく。方便をからずして成佛するところの法にぞありけると。

我本因地、以念佛心。入無生忍。今於此界。攝念佛人。歸於淨土。

これなんそれがしが深く佛門に入り無生忍をえたる因縁に候ぞと、八音響をながしてのべ玉へば、百千の大會は信心肝に銘じて念佛三昧に意をかたづけ、しやかむには善哉々と讃嘆し玉ひさ。

さればには過去久遠劫むかしより念佛三昧をもて自利々他の因縁ふかければ我國に降誕し聖源空大師と化を垂れ玉ふにも念佛三昧をもてろくの衆生を攝し玉ふ。

衆生佛を念すれば、佛心白から凡心に熏じ

香香器に感染する念佛三昧の法と、大師の、

あみだ佛にそむることの色に出では

秋のこずゑのたぐひならまし

の御詠のこゝろを思ひ合せてげにふしぎにたよとかりける。されば四智圓明の月は第一義諦の空に輝き………迹を垂れては宗祖の遺風を仰ぎ、本地のむかしを仰では法王の智慧門を掌り玉ふ孰も念佛三昧をもて寐寐に佛を憶念して自己の胸を虚にして秋のこずゑのたぐひならましとの宗祖大師の御むねになら玉へかし。

佛性の田地を荒す惡魔

日かげのこまのあしなみはやく、もはやことしも秋の半は過にけらし。物さびしき秋風に感じて、佐屋の里にいませる吾同胞のことを今更にもはれて候まゝ久しく御無音せしことをも御わびがてら申進候。名古屋より立んとする頃に歸運法尼西逝のことを承はりてこと定まりぬれば止なく五重傳法の爲に東に歸り再び西にゆく折をと思ひ居りしに計らず五月中旬に信州善光寺もうでがてらに長野傳道と云ことに相成候。同地は十七年むかし傳道せし因縁もあれ廿二月ほど長野縣内にて宣教し引つゞきて上州にて歸り途の傳道是また十七年ぶりにて同縣にも粗二月ばかり止まりて宣教いたしし内に各地の大洪水、折しも關東大洪水の水源地なる、上野國利根郡即ち利根川の水源地に在りて傳道に従事したりし、上州十一郡は悉く大出水、幸に私どもの在地なる利根郡のみが全く無事といふので身には事なく、傳道につくし居たりしが、途中の橋梁陥落通行止絶との事、道の開けるをまちて再び上州高崎市に歸りまた同市にて傳道然るに埼玉縣の教會の地方の大水害を被りしことなれば見舞がてら歸りしに、實に武藏の國北葛飾郡は目もあてられぬ次第にて候。

實に此の悲惨の光景を目撃して深く感じたりしは、天地にみおやの御めぐみは充滿るはづなるに、此世界凭る恐ろしき惡魔が伏在して而して吾同胞をかくまでに慘狀を呈せしむるとは實に憎むべき惡魔かな、それをおもふにつけても私どもの胸も、大みおやの御恵に充さることなれば、何日でも平和と歡喜とに充さるべき筈なるに、折々貪瞋の惡魔が潜在せしが現れ出て佛性の田地を荒し安心の宅を流失せしむるなどとはもはや慎しみて再び發さむらむことをと存候。被害地の見舞終るやまた今回は茨城縣常陸の國へ傳道にまかり出で候。此土地はむかし淨土宗の中興と仰ぐ了聖壇禪師の出土ひし國にして淨土の今日盛隆を見るは全く國師の力なり。また親鸞上人が始て念佛他力の宗旨を開きたるも同じく此地にて候。

昨日は夕まぐれ降る雨につくりし罪も沐かれて十町計りのぼり、眞言宗に有名なる雨引山てよにのぼり、莊嚴美をつくしたる大悲閣の筵にありて大悲の尊像を拜し奉り

て、觀世音は吾等が大みちやの長子にましますば、即ち我等適御見君なれば、懐しくも存じ候。且つまた此國の人々即ち同胞等は

大みちやの御名だに知らて闇路にさまよひしもののみ多ければ、願くば御見さまの御慈しみを以て吾同胞に

大みちやの光明に觸れて良く御子たる本分をつくし、

大みちやの永遠かぎりなき光の御國に入る丈の資格をそなふべき同胞を御引合せ玉へと祈念し奉り候。山靜なる精舎に夜を明しぬ。疊石數十尺の高き樓上に在りて、眞向ふに聳ゆる峯は筑波山てふ己が廿歳ばかりの時に禪那三昧に入て修行せし山なればむかしを忍びて懐しく感じ候。當國は我生國の隣國なれ共始めて今回博道に罷出候願くば闇の人々に、

大みちやの御惠のほどをしらせまほしく候。是より十一月中旬までは常陸と下野とにて博道のつもりにて候。

懐かしき佐屋のそなたにあくがれて、

大みちやの御名をととなえて吾同胞のために光榮あらんことを祈る。何れことしのうちにはまたまかり出候て、御目にかゝることの出來うるやうに、

大みちやにねぎまつりて候。

向中のべたき事山々候へども後のたよりにまで遣し置候。

ふるさとのきよき御國は彼方ぞと

時しもさつきのなかばなれば、ある師の坊にさそはれて菖蒲園に遊覽しければ、あやにうるはしくあやめは咲けらし。花を見るにつきてたゞちに聯想しけるは、かのなつかしき園生に生じける、……………心霊の花はいかにともはやこの頃は、うるはしきをさそひ、覆はしきをあらそふて咲けるは定まれることは、よろこばしき胸の中より己にせめて、波動はたちたりき。

そは外ならずあづかりにし園丁かいたりて未熟にてかつ懶うく、もしもやあたら花園を、下手な園丁の爲にしぞこなひはせぬかと、若しも咲くべき時に咲もせぬとせば、

園丁はむかしならば切腹今日にいはゞ罰金とでも申しませうか、願くば園丁をあはれみ、

如來のみまへに面目をあらしむるやうにあゝ花よ花よとさげびしかば忽ちに心の天は晴れわたりし。いとすゞやかなる聲がきこえける。

「はなはうるはしく、みめぐみのつゆをえて、きよすがたはみむねの如に、そのかばしきにみさかえをあらはし、たえなるいろは世にあるべくもあらじ。きよきみくにはここにきたりにき。無爲のみやこはよそならず、ころの花のひらくところ、いけるぼさつのまします所かゝる妙なる聲の聞きしより最早や、同じくみほとけのみはたらきとはせしなから、あだなる花を見るべくともおもほえず、はるかにそれのかたなる、みそらをながむれば、荒井やまのかねの音はきこえぬ。ころつきて見れば夕日かげいと、うるはしく、ふるさとのきよきみくにを彼方ぞと、御名によりてきよき友の、さちをいのりつゝかへりぬ。

使ひくだされしこと辱く

ミオヤなる如來の大なる御めぐみに感謝したてまつる。無礙光裡に、うるはしき御ころの、生活をもつて、たふとき御名によりて、みさかえをあらはし、いとも幸なる御院内の多祥を賞したてまつる。

そのうち御無音のだん、ざんぎざんげの外なく候。袷褌このほどまで、千葉埼玉地方を経めぐりて目をくらし候。それでもたふとき御じひのふかき、ミオヤはかゝるなまけものをあはれに思召し玉ひてや一日もたふし玉はずして御つかひ下されしことをおもふと、たゞ／＼かたじけなふ、たふとき御名をとなへて、感謝のほかこれなくと存じ候。來月はみなさまに久しぶりにて御めにかかることを得させ玉ふことならむと切に、如來さまに念じ上て居ります。

山々申上たく候へども御面語を期してよろづ申上候。

心は大ミオヤの光明の中に

一六

大ミオヤの光明裡に御院内各御精進に御つとめ爲され候事有難き事に候。

良に惟れば世の中は夢幻の須臾の程有や無やの萬のさま生者必滅は娑婆の習、會者定離は人界の掟、何人も免かれぬ事ながら、嚮きに辨周法尼の西遊あり、また御院主智隨法尼の御遷化あり。我ら及び皆の爲にも世は無常なり須臾も油斷してはならぬ。専らに各自に與えられたる生命の時間を、大ミオヤの光明のなかに畢意にかなふつとめを爲して空しく送り徒らに暮してはならぬと云ふことを自覺させん爲に教訓なされしものと信ずる時は實に御兩尼の皆様に對する御説法は實に深刻なる感が有らんと存候。願くば早く身はここにあり乍ら、心は大ミオヤの光明のなかに意義ある價值ある生活に入るべき様に御心がけなされる事を望ましく候。

ミオヤをよそにして世界に何ものか頼るべき

拜啓殘暑尚酷敷候處、御院主様始めとし、御院内皆様同じくミオヤの御めぐみの裡に魔事なく御日ぐらしのほど辛の至りと遙に賀し奉り候。愚僧事も、

ミオヤのよがき御めぐみにより、怠りがちなながらも日々御奉公申上ることの能きるのば是全く御恩寵のしからしむることなれば、感謝しつゝ日をくらし居り候得ば願くば御慈慮を休めたまはらんことを。

過日御書翰にあづかり辱く拜見仕候。今回真如寺の方へは御弟子さん衆が御都合あしくして御出でてに成り兼候やうマ、ならぬ娑婆の習ひなればこれ止むを得ざることに候。亦承り候へば加藤一正殿兼て御病氣につき御療養の處終に二十三日御命終に相成との御訃音に接しつゝ感じ候。實に老少不定の習ひとは申しながら、二十四歳を一期として遠く不歸の旅となりしとは眼前の無常に閻浮の露命のいかに果敢なきものぞと思へば、如かじかの法性常樂のみやここに到りて金剛不壞の身を獲んにはと。併し乍ら氏は豫て安心決定して、ミオヤを憧憬しつゝ神を入れる日のかたにそゝぎて慈親のみもとに歸せんことを期せるとせば、必らず氏は二十三日午前二時に低頭合掌して高聲

一七

に念佛し、ミオヤの御影と數珠とをもちてありしほどは此國に在し、かども、愚頭已入齋院界、この世界の未だ三時にはならじ一刹那の間には、もはや頭を擧げて拜み奉れば、五百色の光に照らされ水鳥樹林の妙なる響に無始曠劫來の無明の夢さめて、不覺に轉じて眞如門にさとり入らん事。氏は悼を穢土の遺族のかたに遺しあき、自己は神を淨き御くに樂しき御園にうつりて寶の池に浴しては多劫の心魂に染みたる垢汚を洗濯し、いまはいかに清く潔よきすがたとは成りしやらんと思はれて候。

氏はあなた方や私共に此身のげに頼みがたきこと斯の如くにてあるとたしかに示したては有ませんか。大なるめぐみのミオヤをよそにして世界に何物かたよるべきものやあると致へたではないか。私共は今夜にも殺鬼が攻め來ることはないと保すことが出來ぬ身をもて、いかで安心ができません。もはやたしかに如來の大なる御めぐみの中に安立して居りませうか。たとひ有餘の身は有りながらも、こころは淨き御くにのすまひとなりて居りませうか。

いけば念佛の功つもあり、死なば淨土にまいりなん、鬼ても角ても此身には、思ひわすらふことぞなき。

と宗祖大師が吟せられませしが如くに、安心が確立して居ませうか。御慈悲のミオヤは決定して子をすてたまふ思し召は毫しもましまさぬなれども、子はいかにして親をわすれがちになるのでありませう。わたくしは故一正君に對して肉に對するの悼みと靈によるの喜びとが交に感じられます。

一日も早く親子の名乗合ひ出来るやうに

生者必滅會者定離は有爲の世の道れ難き掟とは兼て聞くものの御住持智隨法尼様には先月廿日薨き世の娑婆を辭して、大みおやの在ます西の彼國に逝かせ玉ふたとの事、今更の感にうたれ候。先に辨周法尼已に去りまた御住持様の御遷化實にまぼろしの世をつきてねがふてもねがふべきは大みおやの聖意にしたがふ法にて候。

假令身は娑婆に在り乍ら神は大みおやの慈悲の光明の中に生活する身に一日もはや成らまほしく候。

一八

鶏の卵は殻の中に在るうちに已に眼鼻かたちづくり候故に殻より抜出しても飛出す身に相成申候

我等此肉體に在るうちに佛性の卵がかたちづくり候て、みおやを眞實にしたふ身に成り候へばこそ、臨終に此殻より抜出して神通自在の身にも成り得るものにて候。されば一日も早く慈悲の懷にあたゝめられて信心の開くやうにならまほしく候。

今度世の人々が折角に人の身を受ながら、

大みおやを知らで聞きよりくらきにまよふ身をいかにも思へば同情に耐えず。自からみおやの光明の中に生れさせていたゞきしことのうれしさ、此御恩を報せんが爲にまた大みおやを信じて見れば、すべての世の人々は皆同胞にて候。其同胞衆をしてはやくみおやの光明中に入らしめ度一心よりして、みおやの光なる小冊子を發行して毎月有縁の同胞衆に分たんと欲す。實に自から大みおやの光明中にくらさる身と成りし上からは、實に世の同胞衆にみおやを知らせ、慈悲の乳房を含ませ一日もはやく親子の名乗り合ひ出來うるやうにしてあげ度存候。七部御送附候間有縁のかたぐゝに御分け下されて而して毎月御望の方には御送附候間本社の方に御通知下され度候。成べく多くの人々に御知らせを願ひ下され度候。御弔辭旁々如斯に御廣候 草々

感謝

如來のあたへたまへる明けきひかりと清き空氣とあたらしきかてとによりて一日のつとめを果したる恩徳を感謝したてまつる。今日のいのちは全くあなたの賜なればこそろをつくしてみむねに仕へまつらむことをちかひ奉つる。

すゞしき御めぐみの中

この頃のあつさよりは煩惱のほむらはなはだし。たきつせのすゞしきよりは如來の御めぐみに浴するころはすゞしかるべし。つねにこのすゞしき御めぐみのなかに安住して、にぎり世のなやみをやすめたまへよ。

聖きみむねのたきつせにころの垢をそゞぎ、きよくいさぎよく日々にあたらにし

て、またあらたならんよう、いのりたまへよ。
ア、きよくいさぎよし、みめぐみにそゞがれしころは。あなうるはしころよし、みむねにきよめられし身は。

無聲の聲

拜啓ようやく開晴の天氣に相成候。めぐみの雨にうるはふて草木のますくさかゆるごとくに、みめぐみにより心霊のさかふることをなんいのり候。

天ものいはざるも四時行はれ萬物成るの理り、
如來様は無聲の聲をもてすべてのものに、神聖と恩寵とをもて警告し愛護したまふことを記し玉へ。

大正十二年九月二十日印刷
全 二十五日發行

誌代隔月制年一圓二十錢 毎月制年貳圓

編輯兼發行人

山崎 辨 成

印刷人 東京市外西巢鴨町宮仲二七二二 原 子 廣 宣

發行所

東京市小石川區水道端三丁目四十四番
ミオヤのひかり社
振替東京四九三四八番

ミオヤの光

降魔の巻

靈的生活

生命の有る宗教意識即ち靈の活氣ある信仰を生活するを靈的生活と爲す。世には宗教を唯言語文字の教權を以て眞の宗教と謂ふあり。そは眞實の生命ある信仰に入るべき方便とは成るべけれどもそれを以て知識を以て即ち了解を以て生命ある宗教と云ふものではない。活ける信仰即ち靈的生活の心理状態を説明せんと思ふに、靈的生活もまた肉の生活と其形式に於て相比例すべき點あり。肉の生活には必ず二の職分がある。一は榮養即ち自己を保存するに就て缺ぐことのならぬ食物である。二には生殖で自己の種族を存續するには必要なる男女夫婦間の交渉である。此の二の職分は凡ての生物に至りて共通して生活に伴ふものである。肉の生活の内、榮養を攝取するは動物にも植物にも各自己の養ふに適當せる養分を取つて之を食し之を消化して自己の生理機能を保存し、人の生命を保存するのである。

靈の生活にも之に比すべく或る靈的養分を以て心靈を養ふのである。此靈的元素は

本より法界に周徧せる靈力にて之を本願力ともまた衆生攝取力一大靈力とも又靈的光明とも名づけ彌陀身心徧法界映現衆生心中と云ふ。此靈力の存在することは宗教的實地に實驗に於て明かである。

榮養と生殖とに比例すべき靈的三職分

靈の榮養を法悦と曰ひまた法喜とも云ふ。靈の生殖に比すべき作用を三昧と云ふ。是に附ける妙味を禪悅又三昧樂と云ふ。靈的生活には法喜の食と神人交感の三昧樂とは缺くべからざる職分である。若しまだ此の二職の全からざる宗教意識は唯宗教の知識の分に止まりて未だ眞實靈的生命ある宗教意識にあらざるを云ふのである。

禪三昧爲食また禪悅爲食と云ふなれども食に比するものまた生殖に例するも何れも比例するまでである。然れども此二職分が靈的生命を保存し傳播するの原動力となることは事實である。

靈の糧となる法悦は愛樂佛法味とす。此養素は法界周徧の靈力また靈光にて人の信仰心を以て之を味ふべきのである。此靈的要素の存在は眞實靈的生命のある心靈の常に味ふ處、靈の糧とも云ふべき要素も肉體の榮養と同じく胎兒も母胎にありて養分を受けて長養せらる。生後赤子は自ら消化すべき榮養機能が未だ發達せざる間は母が消化せられたる小兒の消化に耐ふる乳汁として小兒に哺ましむ。小兒は之に由りて養はるる間は其糧となる乳の味に於て、生理衝動の自然に乳を慾求するものにて未だ其味の如何は意識することはなからう。身體の成長するに隨つて生理機能も心理作用も成熟し、其食の味の甘苦も判然と自から意識することが出來得る如くに、靈の糧に於てもまた然りである。初心の信仰心には佛法味即ち法悦の味ひは未だ味ふことはない。初め母の消化せる乳に養はるるやうに師友知識の自己の味ふ處の妙味を分つて之に養はるるは小兒の乳に於けると同じく靈性稍々發達して信心開發し靈的生活に至つて初めて靈的甘露の妙味を實感することが出来る。心靈を養ふべき法喜とは靈的氣分にて心氣快然として皓廓胎蕩として熙怡極りなく心廣く體肝かに、食物でも眼に其色を見鼻に其香を嗅ぎ舌に味ふ如くに、靈の養分も靈的感覺に靈我至美の妙感は感じらるる。